

Title	難易形容詞の意味構造と拡張用法について
Author(s)	南, 佑亮
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 41 P.47-P.62
Issue Date	2007-12
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/3688
DOI	
rights	本文データはCiNiiから複製したものである
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

難易形容詞の意味構造と拡張用法について

南 佑 亮

1. 序

本稿では、英語の tough 構文 (*Tough Construction*、以下 TC) と It 外置構文 (*It-Extraposition Construction*、以下 IE) を扱い、特に *easy*, *hard* といった難易述語の意味構造について認知的な観点から考察する。

- (1) a. This book is easy to read. (Tough 構文 = TC)
 b. It is easy to read this book. (It 外置構文 = IE)

TC と IE の意味的振舞いの違いを扱った研究は複数あるが (Nanni (1978), van Oosten (1986) 等)、両者に共通する意味的制約に着目した研究は管見の限り存在しない。言い換えれば、これまで、TC か IE のいずれか一方でした表現できない動詞句のパターンについての指摘はあっても (Bolinger (1974) 等)、TC でも IE でも表現不可能な (2) のようなケースについては扱われてこなかった。

- (2) a. *This problem is easy to attempt.
 b. *It is easy to attempt this problem.

本稿では、(2) のような事実は、TC や IE という各構文に独自の意味制約から帰結するものではなく、両者に共通する「難易」という概念のフレーム構造の性質から捉えられることを主張する。1) さらに、TC における難易形容詞の拡張事例について検討し、提案の意味構造からそのような拡張を的確に説明できることを論じる。

本稿の構成は以下のとおりである。2節でTCとIEに関する先行研究と本研究の違いを明らかにし、3節では難易形容詞の意味構造のモデルを提案する。4節では、提案のモデルを応用することで、難易形容詞の拡張用法の動機についても的確に説明できることを示す。5節は結語である。

2. 先行研究

2. 1 TCに固有の二つの制約

先行研究の関心は、専らTCとIEの意味上の違いに集中している。IEではなくTCにのみにかかわるものとして、制御性（または意図性）という意味制約が指摘されている(Lasnik and Fiengo (1974), Nanni (1978))。(3)と(4)に示されるように、TCのto不定詞句に生起できる動詞句にかかる制約はtryやconvinceといった制御可能な行為を表す動詞の補文位置に生起可能な動詞句にかかる制約と並行している。一方、IEはこのような制約とは無関係である、とされる(= (5))。

- (3) a. *The money was tough for John to lack. (Nanni (1978: 91))
 b. *That expensive dress was easy for Mary to want. (ibid.)
 c. The lecture was hard for me to understand.

(Nanni (1978: 93))

- d. Your coin was difficult for me to like. (ibid.)
 (4) a. *John tried to {want the coat/lack the money}.
 b. John tried to {understand the lecture/like your coin}.

(Nanni (1978: 93; 一部改変))

- (5) a. It was tough for John to lack the money he needs.
 b. It was easy for Mary to want expensive clothes.

(Nanni (1978: 91))

次に、van Oosten (1986) が TC に特有の意味制約として指摘する、主語の「責任 (responsibility)」という概念について確認しておく。これは、TC では述語内容の成立が主語の NP が持つ内在的な属性に帰属されるものでなくてはならない一方で、IE にはそのような制約がない、というものである。この違いは (6) と (7) のようなコントラストに表れる。

- (6) Joe is impossible to talk to because...
- a. ...he's as stubborn as a mule.
 - b. *...he's out of town.
 - c. ...he's always out of town. (van Oosten (1986: 114))
- (7) It's impossible to talk to Joe because...
- a. ...he's as stubborn as a mule.
 - b. ...he's out of town.
 - c. ...he's always out of town. (ibid.)

(6b) の場合は他の二つ (= (6a), (6c)) と違い、Joe に話しかけることができない理由が Joe の属性 (すなわち性格) ではなく、単に Joe が町にいないという外的状況に帰着されている。このため、Joe は述語内容に関して「責任」を負っていないことになり、このような場合は TC が用いられる文脈としては相応しくない。一方、(7) にあるように IE の場合はそのような制約はなく、Joe に責任がある場合もない場合も、不自然にはならない。

2. 2 本稿で扱う問題

以上、TC と IE に関する二つの知見を概観した。これらは共通して、TC と IE の意味的な振舞いの差異に着目している。その意味ではそれぞれに一定の妥当性が認められるが、いずれの場合も必然的に、説明できる

対象が TC の IE のいずれかが意味的に不適格になる場合に限られている。一方、ここで説明しようとしているのは、(8) — (10) に示すような、TC と IE のどちらで表現しても不自然になる動詞句のパターンについてである。

- (8) a. *This target is hard to shoot at.
 b. *It is hard to shoot at this target.
- (9) a. *This problem is hard to attempt.
 b. *It is hard to attempt this problem.
- (10) a. *These books are difficult to look for.
 b. *It is difficult to look for these books.

(8) — (10) の事実は、「制御性」にも「責任」にも帰することができない。「制御性」に関して言えば、紙面の都合上全ては例示しないが、(8) — (10) で用いられている動詞句はすべて、(11) のように、2. 1 節で挙げたテストを通過する。²⁾

- (11) a. Mary convinced John to shoot at this target.
 b. Mary tried to shoot at this target.

それにも関わらず、これらの動詞句はすべて TC で使用できない上に IE 上でも不適格である。同じく、「責任」で説明しようとしても、問題が生じる。TC の方を「主語に責任がない」として排除できたとしても、IE を排除しようとするならば、責任制約が TC に特有のものであるという前提を捨てねばならないからである。³⁾ このように、いずれの意味制約も、TC が不適格になることを予測し得るだけであって、IE が意味的に不適格になる場合があることをそもそも予測し得ないという原理的な問題に直面してしまう。

論理的に考えて、この時点ですべき方向は二つある。一つは、(8) — (10) において、TC と IE はそれぞれ別の制約によって不適格になっていると仮定し、「制御性」や「責任」といった制約と同じレベルで TC と IE に別個に働く制約を解明する、というものである。今一つは、(8) — (10) は、TC と IE の違いに関わる「制御性」や「責任」といった制約とは別のレベルで働く概念的な制約に起因すると仮定し、その制約を明らかにするという方向である。しかし、前者の方向を取ると、TC と IE の違いを不必要に強調しすぎることになり、余剰的な説明に陥る恐れがある。統語的・意味的研究の両方において、TC と IE の近似性が指摘されている (Berman (1974), Goh (2000) 等) ことも考え併せると、これはあまり望ましい方略とはいえないだろう。よって本稿では、後者の立場で議論を進める。具体的には、TC と IE にとって共通の要因、すなわち難易形容詞が表す意味概念と動詞句の意味との間の相性の問題を考慮することで説明が可能になるという見通しのもと、分析をおこなうことにする。

3. 提案：「難易」概念の二つの側面

本節では、問題となる事実に対し、「難易」という概念の意味構造をモデル化することで説明を試みる。我々が「難易」という概念をどのように理解しているかを考えた場合、すぐに思いつくのは、それが「行為のプロセス」に関わる、ということであろう。「ある行為の難しさや容易さは、その行為の最中に行為者が経験するものである」と規定すれば、我々が「難易度」という概念に対する理解の仕方の一側面を確実に捉えたことになるといってよいだろう。4) たしかに、(12) や (13) のような事例では、難易形容詞はまさに行為者が何かを扱ったり使用したりといった行為のプロセスにおいて経験する「難易」を表しているように思われる。

- (12) a. Grieving men are easier to deal with. (BNC: GOT)
 b. Overall, the program is very useful and easy to use.
 (BNC: HAC)
- (13) a. It was notoriously difficult to deal with Esquivat.
 (BNC: EBP)
 b. The indirect processes are, usually, the easiest with which
 to obtain a tolerable result, but it is difficult to use them
 well. (BNC: J2L)

だが難易概念を「行為のプロセスにおいて経験するもの」と規定するだけでは、何故 (8) — (10) のような場合が不自然なのかは依然として見えてこない。的を射抜くまでのプロセスや問題に取り組もうとするプロセス、本を採すプロセスにおいて、行為主体は困難や容易さを経験するはずだからである。

この問題をクリアするために、本稿では難易形容詞の意味フレームには「行為者の意識の中で行為の結果が特定されている」という側面も含めるべきであると提案する。たとえば、陶芸である種の壺を作ろうとしているが、なかなかうまく作れないとしよう。この時、われわれは壺を作るプロセスにおいて困難さを経験するのは明らかであるが、その困難さの実感、壺を作るという行為の結果として想定されている、壺の完成を念頭に置いているというのもまた事実である。より一般化していえば、単に行為の最中で漠然と「経験」するだけではなく、特定の結果を設定した上で、その結果を成し遂げるのは困難である、と「判断」しているという側面もあるということである。

このように、「難易」の意味概念には常に二つの構成要素があるといえる。一つは行為のプロセスに伴って経験される難易 (= プロセス (Process))

難易、以下 P 難易) であり、もう一つは、行為の結果を念頭に置いたことで判断される難易 (= 結果 (Result) 難易、以下 R 難易) である。今挙げた壺作りのような事例を考える限り、この二つは完全に表裏一体を成すものであり、わざわざ区別して考える意味はないようにも思われるかもしれない。しかし、行為の種類によってはどちらか一方の側面だけが際立たせられている場合がある。上で取り上げた (12) や (13) はその一例である。何かを使ったり扱ったりするとき、その行為による帰結する「結果」は、壺作りのような場合に比べてさほど明らかではない。このような場合、P 難易の方に際立ちが与えられているといえる。

無論、R 難易がより際立つ場合もある。(14) と (15) はいわゆる達成動詞 (achievement verbs) の事例である。この類の動詞句が直接的に意味するのはまさに行為の「結果」である。しかしこの場合、P 難易も喚起される。何かを達成するには、そこに至るプロセスが伴うのが普通だからである。

- (14) a. This degree of co-operation, unfortunately, is not always easy to achieve. (BNC: K9E)
 b. They say information about conditions, staffing and daily routine is difficult to obtain. (BNC: K1J)
- (15) a. No-one ever thought it would be easy to achieve equality for lesbians and gays. (BNC: C9S)
 b. It is not easy to obtain such an award. (BNC: GVH)

このように、P 難易と R 難易のどちらの側面がより際立って解釈されるかは動詞句の喚起する意味フレームと密接に相関していることがわかる。

さて、ここで問題の事例 (8) — (10) を考えてみたい。不自然になっている動詞句群に共通の特性は何であろうか。既に触れたように、P 難易

の側面は満たされている。的に狙いを定めるまでの過程、問題に取り組もうとする過程、本を探す過程、いずれの場合にも困難さや容易さは経験できるであろう。では、R 難易についてはどうか。実はこれらの動詞句では、R 難易が成り立つ条件である「行為の結果の特定」が成立していない。以下に示すように、行為の成立が最終的な目的としている行為の結果について何も指定していないのである。

- (16) a. I shot at this target, and I hit it.
 b. I shot at this target, but I didn't hit it.
- (17) a. I attempted this problem, and I solved it.
 b. I attempted this problem, but I didn't solve it.
- (18) a. I looked for these books, and I found them.
 b. I looked for these books, but I didn't find them.

注意深く考えると、これらの動詞句 (shoot at NP, attempt NP, look for NP) は、その先の結果があることを意味フレームの一部として想起していることがわかる。狙って打ったのであれば、当たったか当たらなかったかの結果がついてくる。解決しようと試みたのであれば、解決したかできなかったかの結果がついてくるし、探したのであれば、必ず見つかったか見つからなかったかの結果がついてくるのである。しかし、これらの動詞句はその結果が成立したか否かについては指定されていない。このように、動詞句の意味フレームが「何らかの結果があることを含意するが、その成立の是非までは指定されない」という特徴を示す場合、TC と IE のいずれにおいても用いられにくくなるという傾向があるといえる。意味フレームの一部として特定の結果を含意するため R 難易は必然的に際立たされるが、その結果が最終的に成立するのかもしれないかがわからないため、難易度を測るための基準が得られず、概念的に矛盾をきたしてしまうので

ある。壺の作成の例でいえば、作成の難易度を測ろうとするときに、壺の完成を目指しているのかどうかがよく分らないという状態に等しい。目指す結果が決まらない限り、R 難易は成り立ちようがないのである。この分析が妥当であることは、(8) — (10) を (19) — (21) と比較することでさらに明らかになる。(19) — (21) の動詞句 (shoot NP, solve NP, find NP) は、いずれも「結果」の成立までを含意している点で、(8) — (10) とは異なっている。それゆえ、TC、IE のいずれにおいても自然な表現であると判断されるわけである。

- (19) a. This target is hard to shoot.
 b. It is hard to shoot this target.
- (20) a. This problem is hard to solve.
 b. It is hard to solve this problem.
- (21) a. These books are difficult to find.
 b. It is difficult to find these books.

本節を締め括る前に強調しておきたいのは、(8) — (10) で取り上げた三つの動詞句のパターンが TC でも IE でも使用できないというのはあくまでも意味概念に基づく強い傾向であって、固定された規則ではない、ということである。よって、これらの動詞句であっても明確な「結果」を読み込める文脈では使用可能になる場合ももちろんある。一例として、(22) を挙げておく。

- (22) a. *This problem is easy to attempt.
 b. This problem is easy to attempt, but difficult to solve.

前節までの議論では、attempt NP は TC でも IE でも適さないということであった。しかし (22b) のような文脈では TC において問題なく使用

される。この理由は、attempt NP によって喚起される、「解こうと試みる」段階と、solve NP によって喚起される「試みた先の、結果 (= 解けるか、解けないか) が特定される」段階を取って分割することによって、述語の前半部において、実際に解けたか否かではなく解こうと試みたか試みなかったかという部分の結果のみを問題にするという (通常ではあまりしない) 概念化を一時的に促進していることにある、と説明できる。5)

このように、本稿で扱った P 難易・R 難易からなる「難易」の意味フレームは、柔軟に変容され、拡張してゆく可能性を持っている。6) 次節では、そのような拡張現象について検討する。

4. TC における難易形容詞の拡張用法について

ここまでは P 難易と R 難易は、同一レベルの概念構成素であるかのように扱ってきた。しかし、実際は両者の性質は異なっている。P 難易は、実際に困難さや容易さを実際に「経験」するという意味で、意味のより客観的な側面を記述している。それに対し R 難易の方は、結果を特定したうえで行為者の「判断」が反映されているという点でより主観的な側面を捉えている。もしこの分類が妥当であるならば、難易形容詞は、Traugott (1989) の主観化 (subjectification) の原則に従い、次第に R 難易の持つ主観的な側面だけを意味するような事例、すなわち行為のプロセスには難易経験は必ずしも伴わず、行為の結果を想定した上での「判断」のみを表すような事例にも拡張される過程が観察できるはずである。ここでは、そのような拡張過程を物語るひとつの事例として、(23) を見ておきたい。

- (23) a. It's {easy/hard/difficult} to come across uncensored information on the Internet.

- b. In case you didn't know, or hadn't already guessed, drugs are very {easy/hard/difficult} to come across in many parts of the world. 7)

(24) Mary tried to {*come across/find} a good partner.

come across NP という動詞句は、行為者の意図なしに「偶然に」NPに遭遇することを意味する。その点で、NPの発見にいたる過程で行為者が「意図的に」NPを探していることを含意し得る find NP などとは明らかに性質が異なる。2. 1節で取り上げた「制御性」の制約の観点に立てば、find NPは制御性を持ちうるが、come across NPは制御性を持たない (= 24)。ということは、原則として come across NPはIEに用いることができても、TCで用いることは不可能であるという予測が得られ、これは(23)の事実と矛盾する。その上、実際に(23b)において難易形容詞が受ける解釈も、いわゆる「難易」の解釈よりも「あり得る可能性が高い(低い)」といった意味に近づいている。これは、柏野(1993)がIEにおいて実現すると指摘する「法性」の解釈に近いものであると考えられる。しかし、TCとIEの間の意味上の制約の違いを強調するだけでは、このような現象を捉えることはできない。

一方、本稿の提案する意味構造を考慮すると、そのような拡張使用の動機が自然に捉えられる。まず come across NPは、R難易に必要な「結果の特定」は確実に満たしている。しかし(23b)における難易形容詞は、想定されている行為者が come across drugs という行為の過程で難易を経験するということは必ずしも表さず、come across drugs する可能性の高低についての話者の判断の方に際立ちが与えられている。したがって(23b)は、元々P難易度が具現し得る「制御性のある」行為を表す動詞句でしか用いられなかったTCが、主観化により、R難易の側面が際立ち、

必ずしも P 難易度を明確に表わさないような動詞句にも拡大適用された事例である、と分析することができるのである。

ここで確認しておきたいのは、本稿の議論は、TC と IE の差異を考慮することが不必要であると主張しているわけではない、ということである。TC と IE は当然異なった意味構造を有している。第一に、使用可能な動詞句の種類が完全に一致することはまずあり得ない。(23b) のような拡張は可能であっても、(3a) や (3b) のような事例が使用可能になるのはほとんど不可能であることは容易に想像できる。何かを欲したり欠いたりするプロセスに難易の経験や行為の結果が伴うことはまずあり得ないからである。したがって、「制御性」の制約そのものが完全に誤ったものであるとはいうことは考えにくい。また (23) に関しても、(23a) は問題ないが、come across は意図的に行う行為ではないので (23b) は奇妙であると判断する話者もいる。⁸⁾ このような違いは、TC と IE がそれぞれ独自に持っている意味的な性質を考慮しなくては説明できないであろう。

しかし一方で、(23b) のような用法が現に存在するという事実を捉えるためには TC と IE を分かつ「制御性」の原則に言及するのみでは不十分で、その原則を乗り越えることを可能にした要因についても明らかにしなくてはならない。本節では、そのような変化を動機づける要因として、3 節で提案した難易の意味フレームが有効に機能するという点を論じたわけである。

これまでの研究では、IE と TC の意味的な相違点のみが強調されてきた。しかし、「難易」を表す述語が共通しているという点では両者は決して無関係ではなく、そういった構文上の違いを超えて意味的な振舞いが類似する場合があることも容易に予想できる。そしてそういった事実は、難易という意味概念そのものの構造にまで踏み込むことで初めて適切な記述・説明が可能になるのである。

5. 結語

本稿では、難易形容詞の意味構造について、行為者が行為のプロセスにおいて経験するP難易と行為者が想定する行為の結果にかかわるR難易の二つの側面から構成されると見做すことを提案した。これにより、まず「難易」という概念を一元的なものに見做す限りにおいて決して捉える事のできない事実、すなわちTCでもIEにも適合しにくい動詞句パターンが存在することについて適切に説明できることを示した。さらに、制御性制約のみからは予測できない動詞句パターンがTCに生起し得る事実も、本稿の説にTraugott (1989)の主観化の観点を加味することで、自然に捉えることができると論じた。

本稿は、先行研究の知見との違いを強調し、TCとIEの共通性を物語る事実に着目したが、実際には二つの構文は異なる性質を持っており、4節で示したようなTCにおける難易形容詞の拡張にも、一定の傾向や拡張の限界が認められるはずである。そしてそういった点を明らかにするためには、二つの構文の性質の違いと本稿で提案した「難易」の意味フレームとの相関関係について更に詳しく検討する必要があるだろう。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

- Berman, Arlene (1974) *Adjectives and Adjective Complement Constructions in English*. Ph.D. dissertation, Harvard University.
- Bolinger, Dwight (1974) "John's Easiness to Please," *Special Issue of IRAL on the Occasion of Bertil Malmberg's 60th Birthday*, ed. by Gerhard Nickel, 17-28, Julius Groos Verlag, Heidelberg.
- Fillmore, Charles J. (1982) "Frame Semantics," *Linguistics in the Morning Calm*, ed. by The Linguistic Society of Korea, 111-138, Hanshin, Soel.
- Goh, Gwang-Yoon (2000) "Pragmatics of the English Tough-Construction,"

- NELS 30 (1), 219-230.
- 柏野健次 (1993) 「easy タイプの形容詞の3つの意味」, 衣笠忠司・赤野一郎・内田聖二 (編) 『英語語法演習 英語基礎語彙の文法』, 145-154, 英宝社, 東京.
- Kim, Boomee (1995) "Predication in *Tough*-Constructions," *WCCFL* 14, 271-286.
- Langacker, Ronald W. (1995) "Raising and Transparency," *Language* 71 (1), 1-62.
- Lasnik, Howard and Robert Fiengo (1974) "Complement Object Deletion," *Linguistic Inquiry* 5, 535-571.
- Nanni, Deborah (1978) *The Easy Class Adjectives in English*, Ph. D. dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Traugott, Elizabeth Closs (1989) "On the Rise of Epistemic Meaning in English: An Example of Subjectification in Semantic Change," *Language* 65 (1), 31-55.
- van Oosten, Jeanne (1986) *The Nature of Subjects, Topics and Agents: A Cognitive Explanation*, Indiana University Linguistics Club, Bloomington.

コーパス

The British National Corpus Online

(<http://scn02.corpora.jp/~sakura04/cgi/bin/login1.cgi>) [BNC]

- 1) 本稿で述べている意味構造は、広義のフレーム (Fillmore (1982)) と捉えてよいと思われる。但し、ここで扱う難易概念に関して言えば社会・文化的な要因などはあまり想定されていない。
- 2) attempt NP を try の補文動詞として用いるのはおかしい、とは言えるかもしれないが、convince などのテストであれば attempt NP も全く問題はない。
 - (i) Sam convinced Mary to attempt that problem.
- 3) 仮に「責任」制約が IE にも適用され得る制約だとしても、何をもって動詞句の目的語 NP に責任があると判断するかの基準がかなり曖昧であると言わざるを得ない。尚、van Oosten (1986) の責任制約に対するより本質的な批判については Goh (2000) を参照。
- 4) 事実、先行研究においても、「難易」の意味概念を捉えるために、概ね「行為のプロセスにおいて経験するもの」という形で定義されている (Kim (1995), Nanni (1978), Langacker (1995), etc.)
- 5) 言うまでもないが、次のように言うとも矛盾することからも、明らかに「試

みる」という行為自体の結果は特定されている、つまりR難易の概念化が可能であることがわかる。

(ii) ??I attempted this problem, but I didn't attempt it.

- 6) 本稿では基本的に使用できないとして扱ったが、look for NPについても、調査した三人のインフォーマントの間で容認性に食い違いが見られた。二人 (Anisa Schardl 氏、Keith Allan 氏) は IE でも TC でも決して使用しないという意見だったが、もう一人 (Samantha Hodgson 氏) に関しては、(iii) のように言えば自然に使えるということであった。

(iii) This book will be difficult to look for.

一つの可能性として、(iii) が容認できる話者にとっては、look for NP は、発見するところまでを読み込んでいるということが考えられる。ではなぜそのような「読み込み」が可能なのかが問題になるが、これについては、発見という結果を特定する find NP と look for NP で喚起される事態に伴う難易の種類が著しく一致するという事実が関係していると思われる。我々の日常経験において、何かを見つけるのに伴う苦勞はそれを見つけようと探している過程における苦勞に一致するのが普通だからである。このような概念的近似性が、(iii) のような事例の使用を促進している可能性は十分にあるだろう。

- 7) (23) はいずれもインターネット上から筆者が採取したものに Samantha Hodgson 氏の協力を得て修正を施したものである。
- 8) Keith Allan 氏の指摘による。一方、他のインフォーマント (Kate Burridge 氏、Samantha Hodgson 氏) は (23b) を自然であると判断した。

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

On the Semantic Structure of "Easiness/Difficulty" Adjectives and Their Extended Usage

Yusuke MINAMI

This paper discusses the semantic structure underlying the adjectives meaning "difficulty/easiness" (=D/E adjectives), which enter into It-Extrapolation Construction (=IE) as well as Tough Construction (=TC). In the previous studies, the differences between these two constructions have been highlighted and several semantic constraints unique to TC became apparent (e.g. controllability constraints on the to infinitival clause, etc.). However, no particular attention has been paid to the semantic constraint common to these two structures; for example, some patterns of VP are compatible with neither of these constructions, as exemplified in (1), which obviously cannot be reduced to the difference between TC and IE.

- (1) a. *That target is easy to shoot at.
 b. *It is easy to shoot at that target.

I will argue that the facts such as (1) can be captured by inspecting the semantic frame of "difficulty/easiness" (=DE). Specifically, I propose that the frame is composed of two related components; the process-oriented DE and the result-oriented DE. Which of the two components receives a higher salience depends on the interplay between the semantic frame of the VP in the to infinitival clause and that of the predicate (i.e. a DE adjective). As to the problematic cases like (1), even though the frame of the VP ("shoot at NP") does evoke the result of the action, which induces the result-oriented DE to be salient, the "difficulty/easiness" of that action cannot be conceptualized since the VP frame leaves it unspecified whether the result is achieved or not. Lastly, I will argue that such a frame structure of the DE adjectives properly predicts some extended instances of TC and IE where VPs like "come across NP" occur in the to infinitival clause.

キーワード： 難易度, フレーム, プロセスvs.結果, Tough構文, It外置構文